佐世保市民の環境意識にみられた性差

西　村　千　尋
綾　木　歳　一

Ⅰ．はじめに

環境保全についての理解を深めることを目的に行う環境教育は，単に知識や技術の習得を目的とするだけでなく，環境活動への参加や日常生活での配慮に取り組む人材を育成することも期待される。我が国でも，2003年に環境保全・環境教育推進法が施行され，制度面でも整えられたと言えよう。この環境教育を行う際には，やはり対象者の属性，年代，生活背景などを考慮した上で進められるべきであり，その教育効果として，グローバルな環境問題に対して，地域からあるいは日常生活の中から環境に配慮した行動をとれるようになることが期待される。

そこで，我々は効果的な環境教育を模索するため，長崎県内の大学生や一般市民の環境意識について調査を進めてきた[1,2,3,5]。まず，長崎県立大学学生の環境に関する意識について，長崎県内の他大学の学生を比較対象に検討[5]を行ったところ，環境活動への参加度は他大学の学生と変わらないとともに，参加しない理由も，他大学と同様に，主に機会がなかったことによるものであった。しかしながら，日常生活における環境への配慮は，名古屋地区の学生に比べ，低い状況であり，この状況は長崎県立大学の学生だけでなく，同県内の他大学の学生においても同様であった。これに対し，環境破壊防止に効果的な方策としては，名古屋地区の学生では回答率

が20％にも満たなかった「リサイクル活動」と「自然エネルギーの利用」が長崎県内の大学生では効果的な方策として答えた者が多かった。このことは，都市環境の状況の違い，換言すれば自然環境の違いがもたらしたものと考えられる。

さらに，同様の調査[1)]を長崎県佐世保市に在住の市民を対象に実施し，大学生と比較したところ，市民の環境保全への関心は大学生よりも高いものの，環境活動への参加度は低かった。参加の機会が少ないことがこの原因のひとつであることは，大学生の場合と同様であろうが，市民の場合，これに加えて時間がないこともあげられる。しかしながら，日常生活において何らかの形で環境に配慮した取り組みの経験がある市民は，大学生の場合に比べると有意に高く，またその取り組み内容も大学生よりも豊富であり，積極的な取り組み姿勢を示すことにより，省資源・省エネルギーを心がけた生活を心がけていることがうかがえた。すなわち，市民は多忙な社会生活により環境活動に参加する機会や時間を割けない中で，日常生活を通じて可能な環境に優しい取り組みを行っている状況が明らかになった。

ところで，環境意識は，個人が受けてきた教育や日常体験など，様々な影響を受けて形成されると考えられる。したがって，環境意識と性的属性の観点から検討を加える必要があるものと思われる。事実，長崎県立大学大学生の環境意識について，その性的属性との関係で検討[2)]したところ，男女とも環境保全に対する関心は高いが，男子学生が女子学生に比べて統計的に有意に関心が高かった。しかしながら，環境活動への参加度は女子学生の方が高い傾向を示し，関心の高さが必ずしも実際の行動に反映していない。また，関心のある環境問題，環境破壊防止に効果的な対策，さらに今後学習した方がよい環境問題に関しては，女子学生が「ゴミ問題」「食の安全」「リサイクル」などのより身近な問題や対策を重視するのに対し，男子学生は「地球温暖化」「大気汚染」などの地球規模の環境破壊と関連した問題を重視する傾向が認められた。

そこで，本研究では，長崎県佐世保市在住の市民を対象に行った環境に

関する意識について性的属性の面から分析を行い，今後の環境教育の一助にするものである。

II．方　　法

1．調査方法

調査方法は直接依頼によるアンケート調査とした。アンケートは，小田らが名古屋地区で行った報告[4]を参考に作成した。

調査は2004年11月中旬，佐世保市主催の「健康と福祉のフェスティバル」において，NPO法人ヘルスシップ佐世保21の測定ブースを訪れた18歳から84歳の市民100名を対象とした。そのうち男性は32名（平均年齢64.8±16.1歳）で，女性は68名（61.8±15.2歳）であった。

2．統計処理

統計処理は，SPSS 12.0J for Windowsを用いて行った。対象者の性的属性と回答肢の検討に関しては，独立性の検定である χ^2 検定を用いた。有意水準を5％とした。なお，欠損値は分析対象から除外した。

III．結果および考察

1．環境保全への関心（図1・2）

環境保全について関心があるかについての質問に対し「とてもある」「ややある」と答えた男性は93.8％，女性は100％であった。性的属性と環境保全への関心の有無に関して有意な関連性は認められなかったものの，男女とも関心がかなり高かった。大学生の報告[2]では，性的属性と環境保全への関心の有無には有意な関連性が認められている。すなわち，男子大学生の方が女子学生より関心の高い結果が得られている。社会人である市民においては，大学生に認められたような性別による違いはなく，しかも社会事

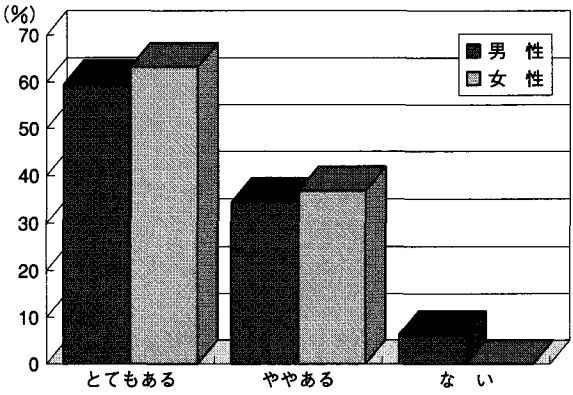

図１．環境保全への関心

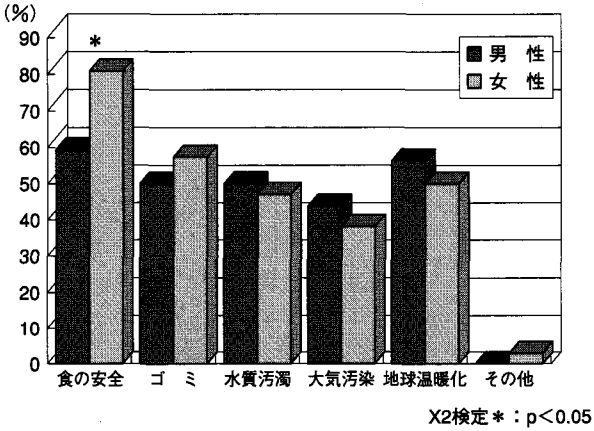

図２．関心のある環境問題

象としての環境問題に対して性別を問わず高い関心を有していることがうかがえる。

さらに，環境保全への関心が「とてもある」「ややある」と回答した市民に，関心のある環境問題を回答肢の中から選択してもらったところ，男女ともに最も多かったのが「食の安全」であった。また，この「食の安全」の項目と性的属性との間には有意な関連性が認められ（$p<0.05$），男性よ

りも女性において関心が高いことが明らかとなった。男性において続いて多かった項目は「地球温暖化」「ゴミ」「水質汚濁」，一方女性においては「ゴミ」「地球温暖化」とほぼ同様な項目であった。「食の安全」を除く項目では性的属性と関心のある環境問題の間には有意な関連性は認められなかった。大学生の調査[2)]でも，「食の安全」は男性より女性において有意に高い回答率を示しており，世代にかかわらず関心のある項目は共通していることが明らかになった。

2．環境に関わる講義・講演等の受講経験（図3）

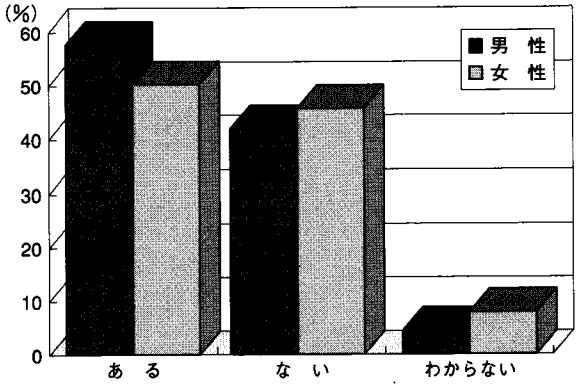

図3．環境に関わる講義・講演等の経験

環境に関わる講義・講演等の受講経験においては，男性が56.3%，女性が49.2%であった。性的属性と環境に関わる講義・講演等の受講経験には有意な関連性は認められなかった。一方，大学生における調査[2)]では，男子学生の方が女子学生より環境に関する講義の受講経験があると回答した者が多いという結果であったが，男子で24.2%，女子で15.0%と，いずれも市民の男性の56.3%，女性の49.2%よりもかなり低い数字であった。大学生の場合は，男子学生が女子学生と比較して環境保全への関心度が高いことが影響しているものと思われるが，社会生活を送っている市民において

はその差はなくなり，男女とも高い関心を持っていることが推測される。

3．環境活動への参加度および参加しない理由（図4・5）

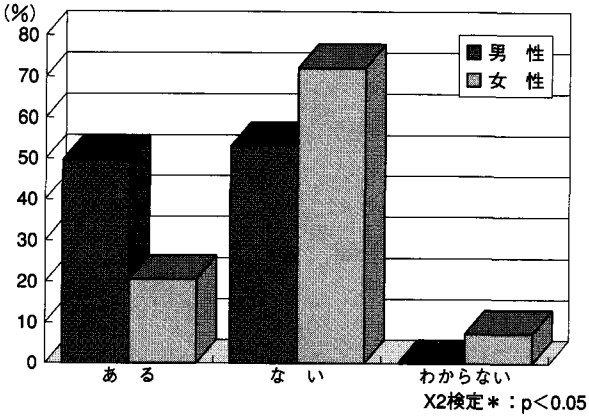

図4．環境活動への参加度

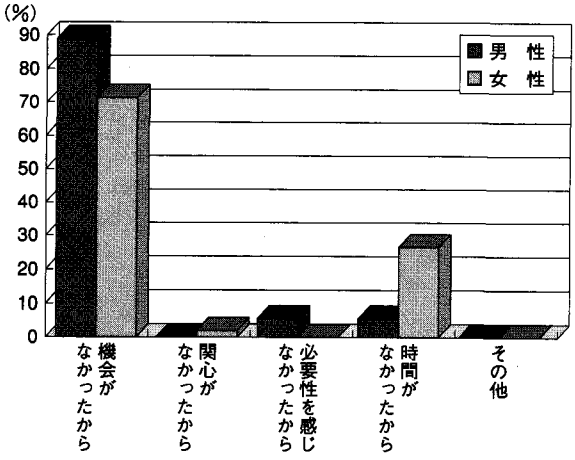

図5．環境活動に参加しない理由

環境活動への参加度を検討したところ，男性が46.9%であったのに対し，女性は20.6%であった。性的属性と環境活動への参加状況には有意な関連性が認められた（$p<0.05$）。すなわち，女性に比して男性の参加度が高いことが明らかになった。これに対し，大学生では，女子が50.5%，男子が36.7%と，両者の間に統計的な差は認められないが，女子学生の方が積極的に行動しており，市民とは逆の傾向が認められた[2)]。

市民の環境活動に参加しない理由として，「機会がなかったから」と答えた者が最も多かった。男性の88.9%が「機会がなかったから」と答えており，一方女性では71.4%であった。これに引き続き理由として回答の多かった項目は，「時間がなかったから」であり，男性が5.6%，女性が20.9%であった。いずれも性的属性と環境活動に参加しない理由の間には有意な関連性は認められなかった。同様に，大学生においても，同様に「機会がなかったから」と答えた者が60%以上と最も多かった[2)]。

以上のように，大学生同様，市民においても，環境活動への参加の機会が少ないことを理由としてあげていることが明らかとなった。環境活動自体の絶対数が少ないことによるものなのか，環境活動自体は十分な規模で行われているものの市民にまで至るインフォメーションが少ないことによるものなのか明白ではないが，今後市民が参加できる環境活動やその周知方法，さらに市民自らが活動を惹起できるような方策が必要であろう。

4．日常生活での環境配慮とその内容（図6・7）

日常生活において環境配慮の有無において検討したところ，配慮したことがあると回答した者は，男性および女性でそれぞれ93.5%と75.8%であった。性的属性と環境配慮の有無には関連性は認められなかったものの，女性に比べ男性は日常生活において環境への配慮が高い傾向がうかがえた。これに対し，大学生[2)]でも性的属性と環境配慮の有無に有意な関連性は認められなかった。また，その回答率は男子が52.4%，女子が50.9%と，市民に比べ低い率であった。

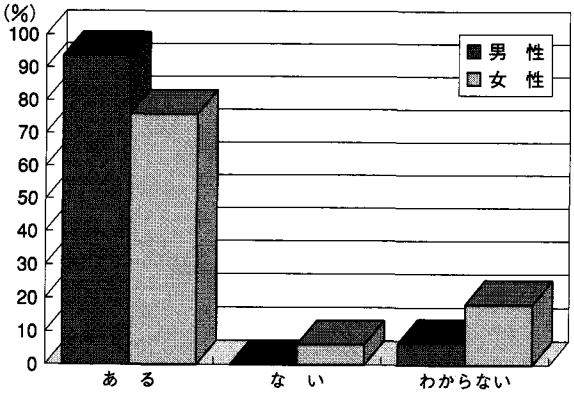

図6．日常生活での環境への配慮

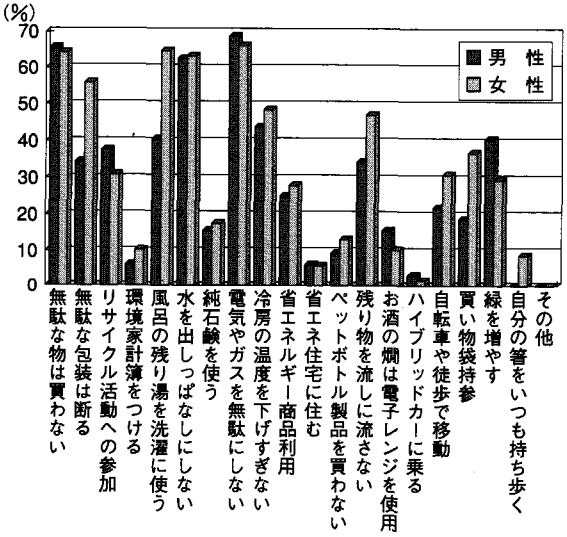

図7．日常生活において環境へ配慮している内容

具体的な内容についてみると，市民において，男女とも回答が多かった項目は，「電気やガスを無駄にしない」が最も多く，次いで「無駄な物は買わない」「水を出しっぱなしにしない」であった。性的属性と日常生活での環境配慮の内容において関連性が認められた項目は，「無駄な包装は断る」($p<0.05$) と「風呂の残り湯を洗濯に使う」($p<0.05$) で，いずれも男性よりも女性において高い回答率であった。また，有意ではないものの傾向として認められた項目は「買い物袋持参」($p<0.10$) と「自分の箸をいつも持ち歩く」($p<0.10$) であり，これらにおいても男性より女性において高い回答率であった。一方，大学生[2)]においては，男女共通して「水を出しっぱなしにしない」が最も多く，次いで「電気やガスを無駄にしない」「冷房の温度を下げすぎない」「自転車や徒歩で移動」であった。また，女子学生の回答率がどの項目についても，有意ではないものの男子学生より高い傾向を示した。環境配慮を行っている具体的な項目においても，おおむね共通するものが多かった。

以上のように，佐世保市在住の市民においては，女性の環境活動への参加度は男性より低いものの，日常生活における環境への配慮は男性より高い傾向であり，日々の暮らしの中で環境問題に接している状況であるといえよう。

5．環境破壊防止に効果的な対策（図8）

男性において，環境破壊防止に効果的な対策として回答が多かった項目は，「法による規制」が最も多く，次いで「学校などの学習の徹底」「リサイクル活動」であった。一方，女性においては，「リサイクル活動」が最も多く，次いで「法による規制」「学校などの学習の徹底」であった。男女とも上位3項目は同様の項目であった。性的属性と具体的な対策の間に有意な関連性は認められなかった。また，大学生[2)]において，男女ともに最も回答率が高かった項目は，「リサイクル活動」であった。女子学生においては，これに次いで「自然エネルギーの利用」「法による規制」「地域のボラ

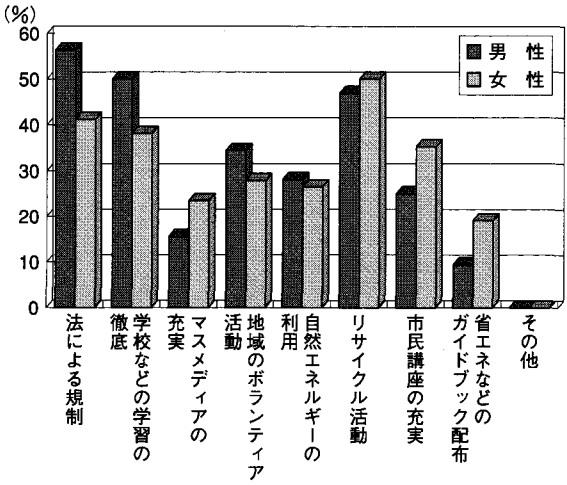

図8．環境破壊防止に効果的な対策

ンティア活動」であった。一方，男子学生では，「法による規制」「自然エネルギーの利用」「学校などの学習の徹底」をあげていた。これらのうち「リサイクル活動」と「地域のボランティア活動」は女子学生が男子学生より有意に高い回答率であった。

環境破壊防止に効果的な対策においても，女性では「リサイクル活動」といった自らが身近で取り組める対策をあげており，日常生活での環境への配慮と同様，女性では生活場面で環境問題をとらえていることがうかがえる。

6．今後学習した方がよい環境問題（図9）

今後学習した方がよい環境問題として最も多かった項目は，男女とも「ゴミ問題」であり，次いで「リサイクル」「地球温暖化」であった。性的属性と今後学習した方がよい環境問題の間に有意な関連性は認められず，独立した関係であった（$p>0.05$）。一方，大学生[2)]においても，男女とも回答率

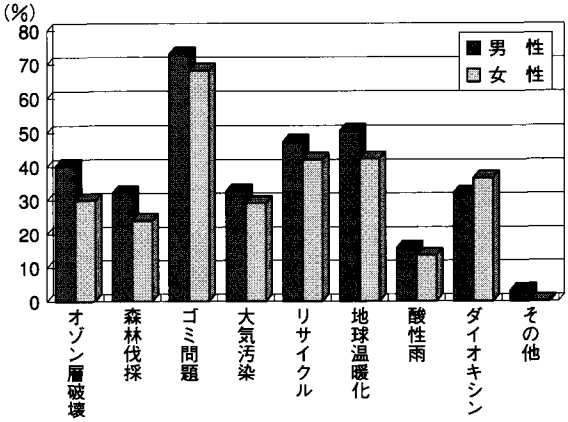

図9．今後学習した方がよい環境問題

が高かったのは「ゴミ問題」であり，次いで「リサイクル」「地球温暖化」であった。「ゴミ問題」においては統計的に有意な差が認められ，女子学生が男子学生より高い回答率を示した。

「ゴミ問題」において認められていた男女大学生での回答率の違いは，市民では認められなかった。これは佐世保市におけるゴミ有料化の影響や，国際規格のISO14001（環境マネージメントシステム）審査登録活動などを通じた各事業所におけるゴミへの関心の高さなどが影響しているものと思われる。

Ⅳ．ま と め

長崎県佐世保市在住の市民100名を対象に環境に関するアンケートを実施し，性的属性との関係で検討した。その結果，環境保全への関心は男女ともにかなり高いが，環境活動への参加度は男性より女性の方が低かった。男女とも参加の機会が少ないことをその理由として最も多くあげていたが，女性においてはそれに次いで時間がないことをあげていた。しかしながら，

女性においては「無駄な包装は断る」「風呂の残り湯を洗濯に使う」など，日常生活において環境に配慮した取り組みは，男性より女性の方が有意に多かった。また，関心のある環境問題をみても，「食の安全」において男性より女性の方が高い回答率であったことから，女性は男性に比して関心の高い環境問題を身近な観点でとらえ，日常生活の中で配慮していることが明らかとなった。

謝　辞

本研究を行うにあたり，多大なるご協力をいただいたNPO法人 ヘルスシップ佐世保21 末永貴久氏に心から感謝申し上げます。

本研究は，平成14•15年度長崎県立大学学長裁量分研究費[QOL (Quality of Life) からみた地域づくりに関する基礎的研究（研究代表者：吉居秀樹)] および平成16年度長崎県立大学学長裁量分研究費（学長指定研究）[[QOL (Quality of Life) からみた地域づくりに関する発展的応用研究(研究代表者：吉居秀樹)] の支援を得て行われたことを付記する。

引用・参考文献

1）綾木歳一・西村千尋：市民と学生の環境意識にみられる特徴―長崎県立大学学生と佐世保市民に対するアンケート調査の分析から―．長崎県立大学国際文化経済研究所　調査と研究，第36巻第1号，2005年，(投稿中)．

2）綾木歳一・西村千尋：長崎県立大学学生の環境意識に認められた性差．長崎県立大学論集，第38巻第2号，2004年，95-106頁．

3）綾木歳一：長崎県立大学における環境教育の現状と課題―自然科学の視点から―．長崎県立大学国際文化経済研究所　調査と研究，第34巻第1号，2003年，45-49頁．

4）小田奈緒美，大野秀夫：女子大生の環境と健康における意識に関する研究―名古屋地区のアンケートをもとに―．日本生理人類学会誌，第8巻特別号(1)，2003年，70-71頁．

5）西村千尋・綾木歳一：長崎県立大学における環境と健康に関する意識調査．長崎県立大学国際文化経済研究所　調査と研究，第35巻第1号，2004年，257-268頁．